

かしまし

かしまし～ガールミーツガール～
18禁小説本

PARALLEL ACT

なにまし

目次

第1章	5
第2章	14
第3章	23
あとがき	36

あらすじ

3

やす菜の元からはずむを奪い返したとまり。自分の想いはずむにぶちまけ、本当の意味で身も心も結ばれる。

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

今日もはずむととまりはセックスをする。そして、とまりははずむに告白しようとするが、やす菜への告白を相談される。

2

はずむが女になって数ヶ月後、なぜかペニスが生えたとまり。その事はずむに相談しようとするが、はずむはやす菜に、手籠めにされていた。

第1章

1

「ああ、はずむう」

「とまりちゃんの中、今日はいつもよりも熱くて、締まってるね」

「それははずむだつて…… ああっ！」

ぬちゃり、ぬちゃり。

はずむの部屋の中で、液体が擦れる淫らな音が響く。裸のとまりが横になって寝ている。同じく裸のはずむが、とまりの左足を抱えながら、右足に乗っかり、股間を密着させ、腰を振っている。音の発生箇所は、その接点からだ。

はずむは、とまりの左足を右側に下ろすと、とまりに覆い被さった。胸と胸が密着する。お互いの汗が混ざり合う。

はずむが腰をぐりぐりと回転させると、それに合わせるかのようにとまりの膣も蠢く。「蠢」は春に虫が二匹いると書くが、本当に虫が絡まっているかのようだ。

その感触を味わった後、はずむは身体を起こし、とまりの身体をひよいと抱えると、自分に座らせた。スレンダーなとまりは軽くて、簡単に持ち上がる。

「軽いなあ、とまりちゃんは」

「はずむの力が強いからだろ……」

華奢に見えても、園芸をやっている為にははずむは案外力がある。土や肥料、水などの重い物を運ぶし、立ったりしゃがんだりする作業が多くて筋肉が付く。とまりの体重を支えるくらい訳なかった。

「あ……」

とまりの小さな胸の乳首を嘗めると、悩ましげな吐息が立った。陸上部で無駄な脂肪がほとんど無いとまりは、胸も大きくない。あまり揉む事が出来ない代わりに、乳首が開発されていた。そこに刺激を与えると、膣がキュツと締まる。

「やつぱり、運動やってると締まりが良くなるのかな？」

「そんな事……」

「膣の締まりを競う競技があったら、とまりちゃんが一番だね」

「バカ……」

まだ若い二人は、膣に色々な物を入れて切断する芸があることなど知るよしもない。

そうこうしているうちに、段々と射精感が高まっていく。

「とまりちゃん、僕、もうそろそろ出るよ」

「ああ、はずむの精液いっぱい出してくれ」

お互いの腰の振りが激しくなる。

「あうっ」

はずむはとまりの腰を押さえつけると、自分の腰に密着させた。とまりの中でペニスが脈動し、どくどくと精液が注ぎ込まれる。

「ああ、はずむの精液が来てる……」

二人は抱き合ったまま、絶頂の余韻を味わう。ある程度息が整うと、ゆっくりととまりがはずむから離れた。とまりの膣口から、白くてどろどろとした液体がゆっくりと垂れ、ぽたぽたと落ちる。

「いっぱい出たな」

とまりは、自分の股間をなぞると、手に付いた精液をペロリと嘗める。膣口からは尚も精液が流れ出て、ベッドを汚していたが気にする様子無く、後ろに下がる。そして前に屈むと、はずむのペニスにかぶりついた。

「ああっ……」

はずむは思わず悲鳴を上げた。射精後の敏感になったペニスへの刺激が背中を抜ける。

「と、とまりちゃん!？」

はずむはその刺激を耐えるように、とまりの頭を掴む。

しかし、とまりははずむのペニスから離れず、精液と愛液にまみれたペニスを丹念に嘗める。綺麗になるに従って、だらんとしていたペニスが再び固く、反り立って来た。

「さあ、はずむ。次はあたしの番だ」

とまりはペニスから口を離し、頭を上げるとそのままはずむを後ろに倒す。そして、はずむの腰の上に跨る。愛液と精液でまみれて、てかてかと光っている内股がはずむから見える。そして、はずむのペニスを握って動かないように固定すると、そこに目掛けて自分の腰を下ろしていく。

「うあ、あ」

「あああっ!」

お互い悦楽の声を上げる。

「暖かい……」

「奥に、当たる……」

空気に晒され、身体の中から外れる口内よりも、腹腔内の方が温度が高い。それが直にはずむのペニスを包み込む。とまりも、体重をかけ、奥まで沈み込ませたために亀頭が子宮口を押し上げるのを感じとった。

「行くぞ……」

とまりが、身体を上下に動かす。精液と愛液でまみれた膣とペニスは抵抗無くスライドする。身体を下ろすタイミ

ングに合わせて、はずむも腰を上げると、さらに深々と突き刺さり、とまりの子宮を突き上げる。

「凄い、はずむ……」

時には突き上げ、時には回転させて膣をかき回す。とまりも堪らず膣を収縮させると、はずむのペニスを締め付ける。それがはずむにもたまらない快感を与える。

「とまりちゃん、僕、また行きそうだよ」

「はずむ、あたしも……」

さっき行っただけだというのに、再び絶頂が近づいてきた。

「はずむ、一緒に行こう……」

「うん、とまりちゃん……」

互いの腰の動きが速くなる。とまりはもはや腰を上下に浮かすのではなく、擦り付けて奥を圧迫するように、腰をくねらせる。はずむも、とまりの尻を掴んで腰を引き寄せ、奥に奥にと進もうとする。固い子宮口と固い亀頭が擦れ合う。

「くうあつー！」

「はあああつー！」

精液がはずむの身体を駆け巡り、ペニスを突き抜け、とまりの子宮へと流れ込む。はずむは堪らず声を漏らす。

とまりの膣も、その精液を搾り取るうと脈動する。体中

が熱く、白くなって放心する。自分が大きく喘ぎ声を上げ、身体も激しく痙攣している事に気づかない程に。

とまりは、暫くは姿勢を保っていたが、ゆらりと傾くと、そのまま一気にはずむに倒れ込んだ。息も荒く、目は虚ろ、身体にも全く力が入らないようで、ぐったりとしている。何も支えていないので、とまりの全体重がはずむに掛かるが、軽いとまりは大したことがない。むしろ全てを委ねられているという、その信頼感が心地よい。

暫くすると、とまりは意識を戻してきた。

「ごめん、重かったろ」

と言いながら右にずれ、はずむの左腕を枕にしながら隣に寝る。その拍子で、結合部が離れた。しかし、今度はぴつたりと足を合わせているので、精液は流れ出てこない。

「ううん、そんな事無いよ」

とまりの言う事を否定しながら、はずむもとまりの方に身体を傾けた。

「とまりちゃん、騎乗位好きなんだね」

「だってそれは……」

（はずむとした、初めての体位だからな）

「はずむ〜 遊びに来たぞ〜 もてなせ〜」

「あ、とまりちゃん。いらっしやい」

その日、まだ小学生だったとまりは、いつも通りはずむの家に遊びに行き、いつも通りはずむの部屋に直行する。

「とまりちゃん、今日は何して遊ぶ?」

「ふふふ〜ん、これ!」

そう言っ、とまりは一冊の本を取り出し、はずむに突き出した。

「何、これ?」

「まあ、読んでみるよ」

そつやつて渡された本のページを、はずむが捲っていく。そして、段々と顔が真っ赤になっていくのを、とまりが悪戯いたずらつけたつぷりの表情で眺めていた。

「な、な、な、何なの? このHな本。男の人と女の人

が…… とまりちゃん、どっから……?」

「ひひ〜ん、凄いだろつ。河原に落ちてたのを拾ったんだ」

「落ちてたのを拾ったんなら、交番に届けなきゃ」

「エロ本をか?」

「……」

エロ本を交番に届けられても、お巡りさんは困ってしま

うだろつ。しかも小学生が。

「なあ、はずむ。この本に書かれている事やってみないか?」

「ええつ!」

「な、面白そうだろ」

「そんな、駄目だよ、こんな事!」

「問答無用!!」

「うわっ!」

そう言っ、とまりはずむの服に手をかけた。はずむは、服を脱がそうとするとまりから必死に抵抗する。

「止めてよとまりちゃん! 恥ずかしいよ」

「裸ぐらい別にいいじゃん。よく一緒に風呂に入ったろ」

「それは子供の頃の話じゃない」

「今だつてあたし達子供じゃないか」

とまりは、はずむの上着を脱がし終わる。そして、ズボンに手をかけた。

「止めて止めて!」

「男が裸ぐらいで恥ずかしがんなよ」

「そんな事ない! 恥ずかしいものは恥ずかしいよ」

「全く、ほら、良いではないか、良いではないか」

「嫌〜っ!!」

どつちが男だか女だか分からない悲鳴が交錯しながら、とまりはずむを全裸にする。はずむは丸まって、自分の

前を隠そうとしている。そして、とまりは自分も服を脱ぎ始めた。

「と、とまりちゃん！ 何を!？」

「だってあたしも脱がなきゃいけないじゃないか」

はずむは、とまりの裸を見まいと顔を掩おほう。とまりは全裸になると、はずむの腕を掴んで、顔から剥むがそうとする。

「ほら、ちゃんと見ろよ」

「そんな、とまりちゃんは恥ずかしくないの?」

「はずむになら見られたって平気だぜ」

「……」

そう言われて、抵抗を止めてはずむはとまりを見る。

「とまりちゃん、昔一緒にお風呂に入ってた頃と一緒だね」

「だろ、って、それは全然成長してないって事か!？」

はずむの言葉の意味に気づいて、とまりは思わず拳を振り上げる。

「ご、ごめんなさい!!」

「それでも、ちゃんと成長したんだぞ。身長とか……」

本当は胸と言いたいが、言えないのが悲しい。

「さてと……」

とまりは気分を入れ替えて、はずむの膝を掴み、広げよ

うとする。

「だ、駄目!」

はずむは広げさせまいと抵抗するが、この頃のはずむは、力ではとまりに敵わない。足を閉じるのは諦めて、大事な所を手で覆って隠す。

「こら、ここまで来たら諦める」

「そこだけは駄目!」

退かせまいとするはずむの手と、退かそうするとまりの激しく手がぶつかる。

「っつん。」

「痛っ!!」

とまりの手が何か硬い物に当たり、はずむが涙目になった。抵抗が無くなったはずむの手を、ゆっくり届かす。

「あゝ、なんだ、はずむ勃起してんじゃん」

はずむの「おちんちん」は何度か見た事あつてが、勃起している「ペニス」を見るのは初めてだ。感動と恥ずかしさから、顔が紅潮する。それに加えて、はずむの大事な部分に衝撃を食らわした事を申し訳なく思う。

「ひっ!？」

とまりははずむのペニスを握りしめる。

「へへ、勃起したらこうなるんだ」

一緒にお風呂に入ってた頃見たペニスは、ぷらんぷらん

して、柔らかそうだった。しかし今は、ごっごつと硬くて、中に骨でも入っていきそうだ。

「こんなに硬いの、中に何が入っているんだ？」

「し、知らないよ、そんなの」

「自分のちんちんなのか？」

「だって、僕お医者さんじゃないもん」

「そりゃそうか」

とまりも自分の身体の事を全て知っている訳じゃない。

「これだけ硬くなってるって事は、大丈夫だよな」

「何が？」

とまりは、腰をはずむの腰の上に持って行く。

はずむからは、とまりのつるつるの縦筋がはっきりと見える。子供の頃は意識しなかったが、今では「秘部」と言える場所だ。

「忘れたのか、セックスするんだよ」

「セックス？」

「さっきの本に載ってた事だよ」

小学生の頃は女子の方が性知識は豊富だったりする。はずむは、「セックス」と言う言葉がさっきの工口本で描かれていた行為だと一致させる事が出来ていなかった。

とまりは、再びペニスを握ると、腰を落とす。そして、自分の大事な部分にペニスの先端を当てる。

「うわっ!？」

はずむはその感触に思わずペニスをひくつかせる。とまりもそれを感じ取り、それを快感だと感じ取る。これを全部沈めたら、どれだけの快感が訪れるのだろうか？ とまりは、期待を込めて腰を沈めた。

「x !？」

「うわあっ!？」

とまりは激痛で顔が歪んだ。処女膜が破れ、発達していない狭い腔をペニスがこじ広げ、まだ濡れていない腔壁とペニスが擦れる痛みが、とまりを襲う。とまりは途中で抜こうかと思ったが、中途半端な姿勢では、再び持ち上げる事は難しかった。結局、最後まで腰を下ろさざるを得ず、はずむのペニスは完全にとまりの中に収まった。

(痛い!! 嘘つき! 嘘つき! 嘘つき! 全然気持ちよくない! 痛い!!)

とまりの目に涙が溜まってくる。股間がズキズキと痛む。早く抜きたいが、抜こうとするとさらに痛みが増しそうで、それも躊躇(ためら)われる。後悔の念に駆られるが、自分から仕掛けたのだからしょうがない。はずむはどうなのだろうか？と顔を上げると、何か様子がおかしい。初めて見る表情をし

ている。

「はずむ?」

とまりの問いに、はずむはゆっくりと答える。

「とまりちゃん…… 気持ちいい……」

(気持ちいい? あたしはこんなに痛いのに?)

とまりが疑問に思っていると、はずむはさらに答える。

「とまりちゃんの中、暖かくって…… 動いていて…… あ、また動いた……」

「そうか、それは良かったな……」

不公平だ。とまりはそう思った。自分は痛いだけなのに、はずむは気持ちいいなんて。悔しさと羨ましが込み上げてくる。

「ああ、気持ちいいよ。なんだか、変な感じ……」

はずむは腰を全く動かしていない。それでも、とまりの中に入れているだけで快感を感じていた。そして、さらにそれが次第に強まってくる。

「あ、あ、あ、とまりちゃん、凄いや、なんか、おかしいよ、僕……」

はずむの腰が段々と震えてくる。ピストン運動と言う訳ではない。押し寄せる快感が本能的に腰を痙攣させる。

「あ!?!」

びゅくびゅくっ! どく、どく…… どく…… どく……

はずむのペニスが痙攣し、精液がとまりに流れ込む。はずむは初めて味わう快感。精通が筆下ろしという、極めて珍しい事例を味わう。

とまりははずむのペニスが痙攣した様に感じたが、はずむと違ってそれは苦痛にしか感じられなかった。今までにない動きと、はずむの様子がおかしい事から、何となくはずむが射精したのだと理解した。

「はずむ、行ったのか?」

「行く……?」

「射精したのかって訊いてんだ」

「射精?」

とまりはもどかしく思う。エロ本を見たのも初めてのようだったし、はずむはそう言う知識が全くなかったのだと、ようやく理解した。

「もついい」

とまりは話を打ち切る。いつまでもこうしている訳にも行かない。とまりは、抜く痛みを覚悟して、腰を持ち上げる。はずむのペニスが射精し終わり細くなっていたのと、僅かには愛液が染み出していたので、スムーズに抜けた。どろり。

抜いて出来た穴から、はずむが出した精液が流れ出る。白くて粘性のある液体。表面に破瓜の血の筋が何本か付い

ている。

「うわっ！ 何か出てきたよ！」

とまりも自分の股間を覗き込む。もちろん見るのは初めてだ。とまりは、流れ出てきた精液を掬うと、その場に座って覗き込んだ。はずむも隣に座って、覗き込む。

「これが、はずむの中から出てきたんだよ」

「そんな。だって、それ、おしっこじゃないよ」

「当然だろ、おしっこ出されて堪るかよ。これは精子と言つて、赤ちゃんの元になるんだ」

用語は間違っているが、当然そんな事は分からない。

「赤ちゃん？ これが赤ちゃんになるの？」

「違う。これと、女の人の卵子とがくっつくくと赤ちゃんになるんだ」

「じゃあ、とまりちゃん赤ちゃん出来るの？」

「あたしはまだ子供だから出来ないの！」

「この赤いのは？」

「さあ？ 血？」

そう言われて、はずむは自分の股間を覗き込み、自分のペニスに血が付いている事に驚く。

「うわっ！ なんて!？」

はずむのペニスを拭くと、綺麗に拭い取れた。
「じゃあ……」

「あたしの血い!？」

二人は慌ててとまりの股間を覗き込む。そして、ちり紙で何度か拭くと、もう出血は止まっているようだ。とまりは、破瓜で出血すると言う知識まではなかった。

「ごめんね、とまりちゃん」

「はずむが謝んなよ。襲ったのはあたしなんだから」

「でも……」

「この事は忘れよう、な！」

「うん……」

3

(そうして、次にははずむとセックスしたのは一年後だったな……)

とまりは、はずむと初めての時を懐かしく思い出す。その頃はまだ処女膜を破ると出血するとかの知識は無かった。

「とまりちゃん、どうしたの？」

「あ、いや、何でもない」

ぼつとしていたとまりを、はずむが覗き込む。それを慌てて取り繕う。

(よし、今日こそ言おう。今日なら言える)

とまりとははずむがセックスをし出してからも何年にも

なるが、告白とかはしていない。恋人同士と言うわけでもなく、いわゆるセフレと言う関係だった。互いに楽しいから、気持ち良いからセックスする、さばさばとした関係だった。買い物に行くとか、映画に行くとか、プールに行くとか、ゲーセンに行くとか、友達と一緒に遊びに行くのと同じ感覚でセックスしていた。言わば娯楽の一つだった。しかし、もうその関係は終りにしたい。ちゃんと告白し、ちゃんと恋人同士になりたい。

(はずむ、なんか順番違うけど、あたし達そろそろちゃんとした恋人同士にならないか?)

心の中で予行演習をする。よし。

「とまりちゃん」

「なあ、はずむ」

「あ……」

同時に名前を呼び合い、二人とも戸惑う。息がピッタリなのは良い事だが、こっぴつ時は困る。

「とまりちゃん、先に言って良いよ」

「いや、はずむの方が先で良いよ。ちよつとだけ早かったし」

「そつ? じゃあ、僕から」

はずむは何を言おうとしているのさろつ? もしかしたらはずむの方から告白してくれるなんて事があるだろうか?

今は希望しか思い浮かばない。

「僕ね、やす菜ちゃんに告白しようと思うんだ」とまりの期待は打ち砕かれた。

とまりは、自分の感情を押し殺して、はずむに告白を勧めた。

そして翌日、はずむは女になった。

第2章

1

「今日、やす菜ちゃんの家ケーキの作り方を習いに行くんだ♡」

（はずむの奴、楽しそうに言ってたな）

はずむの言葉が、とまりの頭の中で何度も繰り返される。とまりは、自分のベッドで仰向けになり、ぼーっと天井を見ていた。

（今頃、はずむの奴やす菜と楽しくやってんだろっな）

とまりは、はずむとやす菜との仲が進展してしまうのではないか、と気が気でない。なら自分も行けば良かったのだが、はずむとやす菜がいちゃついている姿は見たくなかったし、カレーを作った時のような醜態を再び晒して、幻滅されるのはもっと嫌だった。

（ケーキを作るのでも、やす菜が作ったら激辛になるのかな）

とまりはくすりと笑う。はずむにもそう、「激辛ケーキの作り方なんて教わりたくない」と言って断った。はずむは否定していたが、あの超激辛カレーを甘口と言ってしまおうやす菜の事だから分らない。

（やす菜といちゃつく罰だ）

はずむの性別が女になって数ヶ月。もう皆　とまりも含めて　はずむが女である事を受け入れている。しかし、性別が女に変わったとは言え、とまりのはずむへの想いは消える事はなかった。むしろ、月日が経つに連れ、強まっていた。

もしはずむが女にならず、男のままだったならば、やす菜に振られた後自分が告白したのだろうか？

とてもしたとは思えないが、タイミングを失った事だけは確かだった。

「とまりの方が男くせー」

明日太が言っていた言葉を思い出す。

「はは、むしろあたしが男になった方が良かったりして……」
変な考えが浮かぶが、男になれる筈がない（はずむは女

になっただけだ。

(男になりたいか?)

「な、何だ!？」

頭の中に変な声が響いてくる。とまりは思わず叫んだ。

(ペニスが欲しいか?)

「な、何だってんだ!？」

(ペニスが欲しいか? ならばくれてやる!)

「はあ? 意味分かんねえよ!」

とまりは、変な声の主に対して叫ぶ。しかし、返答は

ない。

「!？」

股間が急に痛み出し、とまりは股間を押さえつつ

まった。

「い、痛! 痛!」

とても堪らない。それに、手に何か動く感触が伝わっ

てくる。とまりは、苦しみながらもズボンのベルトを外し、

チャックを開ける。

「!？」

そこにははずむので見慣れたペニスがあった。

「うわーっ!!」

とまりは、ベッドから跳ね起きる。息が荒い。心臓がバクバク言っている。

「なんだ夢か……」

とまりは安心して胸をなで下ろす。よくある夢落ち。

「それにしても変な夢だったな。あたしにちんちんが生えるなんて」

夢ならば驚く必要も、慌てる必要も何もない。

「これが漫画だったら、本当に生えて……」

胸騒ぎがする。それ以前に股間に圧迫感がある。何故か

パンツがきつい。とまりは、そつと、自分の股間を覗き

見る。ズボンのベルトが何故か外れている。そして、窮屈

そうにパンツからペニスが顔を出していた。

「何じゃこりゃ〜!!」

とまりは、胡座をかいて、股間を覗き込み直した。自分

の股間にペニスがある。ぴっちりとした女性用下着から苦

しそうにはみ出している。

「ひ……ひ……ひ……」

涙腺が弛んできた。ズボンとパンツを降ろし、さらに確

認する。確かに、自分の股間から生えている。触ってみる

と、触れる感触がある。さらに触ってみると、段々と大き

くなっていった。

「そんな、生えてる。本当に、生えてる……」

呂律が回らなくなってくる。涙がぼつぼつと零れ、ペニスに落ちる。

「そんな、あたし、男になったの……かよ？」

手が震える。辺りを見回して、携帯を探す。机の上にあるのを見つければ、這って向かおうとするが身体が上手く動かず、倒れてしまう。その時、腕の上に自分の胸が乗った。

「あ？」

とまりはその場で座ると、自分の胸に手を当てる。

「良かった、小さくなってるけど、ちゃんとある」

勿論小さくなったというのは勘違いで、大きさはそのままだ。

「男になったの、ちんちんだけ？」

全て男に変わる以上に違和感を覚える。とにかくとまりは携帯で、はずむに助けを求めた。

2

「いただきま〜す」

やす菜とはずむの二人は、同時にスプーンを口に運ぶ。

「美味しい、やっぱりやす菜ちゃんは料理上手だね」

「そう？ はずむ君も上手くなったわよ」

「そうかな？」

ケーキを作り終えた二人は、やす菜の部屋で試食をしていた。やす菜が指導しながら、二人でケーキを作る。はずむはあまり器用ではないが、失敗した所はやす菜がカバーして修正した。

「ケーキは辛くないんだね」

「今までも辛くしてるつもりはなかったんだけど……」

やす菜が作る料理は、今までもどれも激辛だった。カレーしかり、弁当のオカズしかり。流石に辛くなる材料をまず使わないケーキだと、辛くならない。それとも、味見を担当したのがはずむでなくやす菜だったら、やはり激辛ケーキになったのだろうか？

たわいのないお喋りをしながら、ケーキの試食は終わる。

「あ、はずむ君。動かないで」

「？」

やす菜がはずむの口元にクリームが付いているのを見つけた。やす菜が、それを取ろうと顔を近づける。顔を近づけられたはずむはドギマギする。

「クリームが… 付いてる……」

そう言っつて、やす菜ははずむの口元に付いているクリームをペロリと嘗めた。はずむの口元は綺麗になった筈だが、やす菜はまだ顔を離さない。

「やす菜… ちゃん？」

「まだ、付いてる」

そう言つて、今度は目を瞑り、はずむの唇を嘗めた。そしてそのまま唇を重ねる。はずむは抵抗しない。むしろはずむも目を閉じ、やす菜を受け入れる。

暫くして、やす菜がはずむの唇をこじ開け、舌を入れてきた。これにははずむも驚く。今まで唇を重ねた事は何度かあったが、舌を絡めるディープキスはした事無い。しかし、はずむはやす菜の舌を受け入れた。

はずむがやす菜の舌技にトロソとしていると、今度はやす菜がはずむの胸の触れてきた。何か様子がおかしい。流石にはずむはやす菜を押しつけようとすする。

「嫌っ！」

ようやく顔だけ外れて悲鳴を上げたが、今度はやす菜が全体重をかけてきて、はずむを押し倒した。

「何するの!? やす菜ちゃん! 痛っ!!」

やす菜が、乱暴にはずむの胸を掴む。

知らなかった、胸って捕まると痛いんだ。

「はずむ君、じつとして…… そしたら、優しくしてあげるから……」

「ひっ!」

優しく囁いているのが、逆に怖い。

「どうしたの? やす菜ちゃん。今日のやす菜ちゃん変だ

よ」

「はずむ君が作ったケーキ、とっても美味しかった。はずむ君はどんな味なのかな?」

ケーキに何か入ってた? 使ったのは本に載っていた材料だけで、変な秘薬なんて勿論入れてない。

はずむが怯えて動かないしていると、やす菜がゆっくりと胸に触れてきた。今度は痛くない。びりびりとした感触が胸から背筋を抜ける。自分で触れる時はなんとも感じないのに、やす菜に触られると電気が抜けるようだ。

「はずむ君の胸、大きい。少し嫉妬ちゃう」

そう言いつつ、やす菜の舌が首筋を伝う。首の筋肉がピクピクと震える。

「くうっ!」

「はずむ君、感じてる? じゃあ、ここはどうかな?」

やす菜ちゃんの手がスカートの中に入って来て、内股を撫で始めた。やす菜が乗っかっているので大きくは動かないが、太股がピクピクと痙攣する。

「やす菜ちゃん、お願い……」

「気持ち良いのね、じゃあ、もっとしてあげる……」

「違! ああっ!!」

手が太股を登ってきて、はずむのパンツに触れる。そのままはずむの大事な所を木綿ごしに摩る。

「男の子って、毎日オナニーするんだよね？　はずむ君もしてた？」

「そ、そんな……」

はずむの顔が赤くなる。恥ずかしくて答えられない。

「女の子になつてからは？」

「し、してないよ！」

今度は明確に否定できた。

「じゃあ、ここを触られるのは初めてな訳ね」

「ああん！」

はずむは、女の子みたいな悲鳴を上げた。勿論女になっているのだから当然なのだが、自分でもびっくりするくらい可愛い声だった。

「はずむ君の喘ぎ声、女の子らしい。その調子よ」

やす菜の指が複雑に動く。撫でたり、押ししたり、摘んだり。その度毎にはずむは喘ぎ声をあげる。

「はずむ君のパンツ、ぐしょぐしょ……嬉しい、私で感じてくれているのね」

そう言つて、やす菜ははずむの腕を導き、自分で触らせる。とまりのパンツはいつも濡らしていたが、自分もこんなに濡れるとは思わなかった。

「もうこのパンツ穿けないね」

やす菜がはずむのパンツを脱がし始める。

「だ、駄目……」

「大丈夫、私のを貸してあげるから」

自分が愛用しているパンツをはずむが穿き、はずむが愛用しているパンツを自分が穿く。そんな倒錯した状況を想像して、やす菜はさらに興奮した。

はずむのパンツを脱がし終ると、やす菜は自分のスカートをたくしあげ、股を密着させ、擦り付ける。

「ああっ♡」

普段触れている柔らかいマチ裏と違い、パンツ表面のレーズやら縫い目やらの、ざらざらとした感触がはずむを刺激する。

「私のも濡れちゃった……　はずむ君ったら、いけないんだ。他人のパンツを濡らして」

「そんな！」

はずむは、やす菜の理不尽な言い分に抗議するが、やす菜は気に止めない。やす菜は自分もパンツも脱いだ。

「ひやつ!？」

今度は、温かく柔らかい物が刺激を与える。ぐちよ、じゅる……　卑猥な音が二人の接触部から響く。

やす菜が少し股間を浮かし、再び手を添える。そして、中指を一本はずむの膣口に添えると、そのまま中に入れる。やす菜の細い指は、濡れているはずむの中に、何の抵抗も

なく受け入れられた。

「な、何っ!? 指っ!?」

「はずむ君の中、温かい……」

はずむの中で、指がクイッククイックと動いて、Gスポットを刺激する。

「あん♡ あ……」

「ね、もう嫌じゃないでしょう……」

そう言っつて、やす菜はもうは片方の手で、はずむの胸のボタンを外し始めた。しかし、途中で手を止める。表情が険しくなり、はずむから指を引き抜く。そして両手ではずむの胸ぐらを掴むと、一気に引き裂いた。

「はずむ君。このブラ、私が選んだブラじゃない……」

「え? な、何?」

はずむは、やす菜の表情に恐怖を感じる。今までも恐ろしかったが、まだ顔には愛情があった。しかし、今は憎しみのこもった表情をしている。

「このブラ、とまりさんの選んだブラね……」

「あ……」

「私の所に来るのに、とまりさんの選んだブラをしてきたんだ……」

はずむは「しまった」と思う。本当は思う必要のない事なのだが、やす菜に気圧けあされてそう思った。

やす菜ははずむのブラを掴むと、無理やり引きちぎる。

金具や縫い目が弾け飛ぶ。元々やわな作りにはなっていない物がちぎれるのは、やす菜の怒りが相当なものだと言っ現れである。

はずむはガタガタ震えながらやす菜の様子を窺うかがう。

「もう、優しくなんてしない……」

「……」

「はずむ君は、私のものよ!!」

「ひいっ!」

「嫌っ!! 助けて! 助けて!」

「ビリッ! ビリビリッ!!」

やす菜は、はずむの服を脱がすのではなく破り棄てる。はずむが半裸になった事を確認すると、中指と人指し指を纏め、はずむの中に一気に入れた。

「ぎゃっ!」

一気に入れたために少し穴とずれたのか、はずむが苦痛をあげる。しかし、構わずやす菜は指を動かし始めた。

「嫌っ! やす菜ちゃん、怖いよ! 止めてよ!」

「うふふ…… うはは…… まだよ、まだまだよ。こんなもんじゃないんだから!」

やす菜はさらに薬指も加えて、二本にした。指一本と二本とでは、直径に大きな差がある。幾ら女の子の細い指とはいえ、それなりの太さになった。

「ひっ！ 痛っ!!」

ピッ！ ピピッ!!

はずむの処女膜が耐えられず、一部が裂け始めた。やす菜の指に何本か血線ができる。やす菜はそれに気づいたが、勢いを止めようとはしない。むしろ小指を加え、さらに動きも速くした。

「ぎゃ〜っ！ 痛っ！ 痛〜っ!! 止めて〜っ!!」

はずむの血が、やす菜の指に止まらず、辺りに飛び散り、服や床を汚した。

「はずむ君は、とまりになんか渡さない。はずむ君は私のものよっ!!」

3

トルルルル…… トルルルル……

とまりの携帯から、呼び出し音が流れる。

「はずむっ、早く出てくれよ……」

はずむの携帯にかけるが、いつまで経っても繋がらない。ただでさえ異常な状況なのに、さらに心細くなってくる。

そして、呼び出し音が途切れた。

「はずむ!? あのな、あのな……」

「あら、とまり?」

「?」

はずむの携帯にかけた筈なのに、何故か出たのはやす菜だった。

「なんだよ、何ではずむの携帯にやす菜が出てんだよ」

はずむはやす菜の家にケーキを作りに行っている。手が離せない場合、やす菜が代わりに出る事は十分考えられることだが、そこまで頭は回らない。そして、とまりへの呼称が普段と違う事も。

「だって、はずむ君は私のものになったんだもの」

「何!? どう言うことだ? はずむを出せ!」

「そのままの意味よ。はずむ君は私のもの! あはは!」
「な!? 何言ってるんだ! 今お前の家か!? そこを動くなよ!!」

とまりは、はずむの事で頭がいっぱいになり、自分の状況を忘れてやす菜の家に走った。

「はずむ!! ……!?」

とまりがやす菜の部屋のドアを乱暴に開けると、その光

景に言葉を失った。

はずむは、ベッドに座るやす菜を椅子に座っている。服はびりびりに破かれ、胸も局部もさらけ出されている。しかも局部から太股にかけて、幾筋もの血と愛液が混ざった筋や、飛散した血痕が付着している。顔も泣き腫らしてポロポロだ。

その悲惨な格好のはずむの耳たぶにやす菜が舌を這わせている。はずむの物なのか、やす菜の顔や腕にも幾らか血が付着している。そして左手ははずむの胸を揉み、右手ははずむのクリトリスをローターで刺激している。

「ようこそ、とまり」

「み、見ないで…… とまりちゃん……」

とまりは、その状況に見入り、動けない。いや、むしろ思考が限界を超え、状況を理解できていない。

ローターの音がさらに高まる。やす菜がローターのスイッチを最高まで高める。

「ああああ……」

はずむの口から言葉が消え、喘ぎ声だけになる。

「あっ！ あっ！ ああっ!!」

はずむの身体が大きく痙攣すると同時に、局部から噴水が吹き出した。

「あら、お漏らし？ はずむ君、いけないんだ」

水が止まると、はずむはがっくりと項垂れる。局部からの水は止まったが、腫からの水は逆に量を増す。

そこまで来て、ようやくとまりの思考が戻ってきた。怒りで顔が真っ赤になってくる。ゆっくりと二人に近づいて行き、はずむを両脇を掴むと、やす菜から引き離し、床に下ろす。

「やす菜あ!!」

とまりは、渾身の力を込めてやす菜を引つ叩く。やす菜の顔が身体ごと吹っ飛び、ベッドに突っ伏す。やす菜は暫く動けなかったが、ゆっくりと身体を起こすと、とまりに反撃しようと腕を振り上げる。しかし、運動神経ではとまりに敵わない。振り下ろした腕を、簡単に捕まれてしまう。

「何するの!? とまり!」

「それはこっちの科白だ! はずむをこんな目に遭わせやがって!!」

「はずむ君と楽しんでただけよ!」

「これが楽しんでた様子か!?!」

とまりとやす菜が取っ組み合う。叩こうとしたり、顔を掴んだり、引つ掻いたり、もう何がなんだか分からない。

「止めて、二人とも…… 止めて…… 止めてえ!!」

はずむの制止で、二人は我に返り、はずむの方を見る。

「二人とも、喧嘩は止めて……」

「でもはずむ、こいつはお前を……」

「僕の事より、二人が喧嘩する方が辛いよ……」

「……」

二人は黙った。そっだ、はずむはそう言う奴だ。

「分かったよ。はずむがそう言うなら」

そう言つて、とまりはやす菜を放す。そして、クローゼットを開けると、そこからコートを取り出した。

「借りてくぞ。はずむのためだ」

そう言つて、はずむにそのコートをかける。そのままはずむを連れて部屋を出る。やす菜は止めない。とまりはタクシーを呼んで、はずむを家まで送った。

第3章

1

タクシーが大佛家に着き、とまりははずむを部屋まで連れて行った。やす菜から無理やり借りたコートを脱がす。はずむの半裸体が再び晒される。ボロボロの服は、辛うじて身体に引つ掛かっている程度の量の布しか残っていない。とまりは、はずむの悲惨な姿に思わず目を背けるが、気を取り直して、視線を戻す。

「はずむ、脱がすぞ」

いつまでもこの服、と言つより布を纏まとっているわけにもいかない。とまりは、はずむに掛かっている布を取り始める。

「……とまりちゃん……」

「何だ？」

はずむから話しかけられ、手を止める。

「やす菜ちゃんがあんな事するなんて……」

そこまで言つて、涙で声が掠かすれてくる。とまりは、その

はずむをギュッと抱きしめた。

「僕、やす菜ちゃんに処女奪われちゃった……」

「そんな、処女だなんて」

はずむの口から、処女と言つ言葉が出てきて、少し面食らう。そうだ、女だと「処女」になるんだ。

「そうだね、男の時はとくに童貞じゃなくなってたのに、女になったら処女だなんておかしいよね」

（違う。そういう事じゃ……）

「あ、痛かったのつて、処女膜が破れたからだよね。だったら、やっぱり処女だったのかなあ？」

（処女膜あつたんだ……）

「ごめんね、とまりちゃん。とまりちゃんの処女膜破った時、痛かったでしょ」

「な!？」

とまりは、いきなり自分のことが出てきたことで戸惑つ。しかも自分の処女喪失の話、恥ずかしくなって顔が赤くなる。

「あ、あれはあたしが襲襲つたんだから謝あやまらなくて良いんだよ!!」

「でも、痛かったでしょ」

「良いんだよ、はずむは気にしなくて! それに、やす菜に『処女を奪われた』つて、指でだろ!?! 幾ら処女膜無く

したって、ちんちん入れなきゃセックスしたことにならないんだから、処女だよ!!」

とまりは、自分のことを誤魔化す意味も混めて、一気に捲し立てる。

「そっか、そうだよ。おちんちんでなきゃセックスじゃないよね」

はずむも、納得した様子だった。とまりはほっとした。

「僕もいつかは、おちんちん入れて、セックスするのかな?」

「!？」

考えた事無かった。はずむは女になったんだから、いつかは女として男とセックスする。それはあたしにはなりえない。

『はずむ君は、私のもの』

(!?)

急にやす菜の科白が頭に響いた。男でなくても、女にはずむが取られる可能性はある。嫌だ！男であるうと、女であるうと、誰にもはずむは渡したくない。はずむは、ずっと昔からあたしと……

「……ちゃん。とまりちゃん?」

はずむの呼び掛けで、我に返る。

「どっしたの? とまりちゃん」

とまりは、はずむの瞳を見つめ、再びはずむを抱きしめた。

「な、何!？」

「渡したくない……」

「え?」

「はずむが欲しい。男になんか、女にも、やす菜になんか渡したくない！はずむ、お前が好きだ！あたしは、はずむが好きだ!!」

はずむを抱き締める腕に力が入る。

「とまりちゃん……」

「はずむ、セックスしよ」

「え?」

「セックスしよう。今まで、ずっとして来たじゃないか」

「でも、セックスするにはおちんちんが……」

そうだった。セックスするにはちんちんが…… ある。

ちんちんなら、ある！

とまりは、はずむの手を取ると、無言で自分の股間に導いた。

「な!? 何するの?」

そして、布越しに自分の股間を触らせる。

「あれ?」

はずむも、とまりの股間の違和感に気づいたようだ。

「何？ これ？」

はずむに股間を撫でられ、段々とズボンが苦しくなってくる。とまりは、ズボンのボタンとチャックを開けた。膨らみの存在を想定していない女物のパンツから、ペニスが窮屈きゆうくつそうに顔を出している。

「気が付いたら、生えてた」

「女の子って、大人になったらおちんちんが生えるの？」

「馬鹿っ！ そんな訳あるか。あたしにも何が何だか……」

「!?」

(宇宙先生の仕業だ！)
こんな事が出来、さらに実行に移せるのは宇宙仁しくない。とまりにペニスを生やして、今度は何の調査をしようと言うのか。

「ずっとピル飲んでたから、ホルモンが異常起こしたのかなあ？」

「そ、そんなことないと思うよ……」

はずむは、冷や汗が出てくる。言わば「身内」の犯行だからだ。

「ごめんね、僕ばかり泣いてて。とまりちゃんがおちんちんが生えて苦しんでる時に……」

「あたしの事はいいい……でも、これでははずむとセックスが出来るな」

そう言っ、とまりははずむに口づけする。懐かしいはずむの唇の感触。男だった時に比べて、少し柔らかい感じがする。

「駄目だよ、とまりちゃん。おちんちんが生えても、とまりちゃんは女の子だよ」

「もう半分男だ。それに、やす菜とはやったんだろ」

「やす菜ちゃんとは……無理やり……」

はずむが先程の行為を思い出し、沈み込む。

「ごめん。そうだ、そうだったよな。はずむの意思でやったんじゃないんだよな……」

とまりは、はずむにやす菜の事を思い出させたことを反省する。

「やす菜のことは……やす菜のことは……忘れさせてやる」

そう言っ、再び唇を重ねる。そしてそのままの勢いで、はずむを押し倒す。

「とまりちゃん!?」

とまりは、はずむの首の後ろ、うなじに舌を這わす。

「はあっ!?」

「はずむは、女になってもここが弱いんだな。こんな場所、やす菜は知らないだろ」

「止め、そこ！」

「お前と、何回セックスしたと思ってんだ？ はずむの感じる場所は全部知ってたんだ」

そして、次なるポイントを攻めようと身体を下げる。ふにっ。

(……………)

とまりの手に柔らかい感触がある。じつと手を見ると、はずむの胸を掴んでいる。そうだった。もうはずむは女、男だった頃のポイントはもはや通用しない。首筋だとその事を忘れさせてくれたが、胸も、下半身も、全く変っている。

「ええい！ ままよ！」

そう叫んで、とまりは自分の服を豪快に脱ぎ捨てた。

「要は、やす菜が知らない場所を開発すれば良いんだろ！」

とまりははずむの両膝を掴んで、ガバツと大きく開かせる。

「なに！」

股を開かされ、局部を直視されて、はずむの顔が赤くなる。慌てて局部を手で隠す。男の頃は何度も見せた局部だが、女になってからは初めて見られる。とまりを止めようと少し体を起こすと、自分の内股の汚れに気づいた。シャワーなどで洗い流していないので、自分の破瓜の血や愛液が乾いた跡が、内股に残ったままだ。

そこにとまりが顔を近づけ、舌を這わす。

「駄目だよ、とまりちゃん。汚いよ」

「汚いって、今まで何度も嘗めてきたじゃないか」

「そうじゃなくて、血とか付いて……………」

「なら、あたしが綺麗にしてやる」

はずむの抗議により、とまりは逆に内股を丁寧に嘗める。

舌に鉄の味が広がる。

「あ、ああ……………」

とまりの丁寧な愛撫が、はずむに快感をもたらす。男の時も良く内股を嘗められたが、その時とは比べ物にならないくらい刺激だ。男と女では過敏さが違うのだろうか？ はずむは、とまりがどこを嘗められても善がっていた事を思い出す。

とまりははずむの股の合わせ目まで舌を這わす。はずむの大事な所を広げると、無惨に引き裂かれた処女膜が見える。

「やす菜は乱暴だな……………」

そう言って、裂けた処女膜の傷を癒すかのように、丁寧に嘗める。

「あ、痛…………… あん！」

仮にも傷口、嘗められると痛い。しかし、とまりの舌が膣内や小陰唇、クリトリスも含めて嘗めるので、むしろ快感の度合いが高まってくる。

内股の汚れが、やす菜によって付けられたものから、とまりによって付けられたものに換わった頃、ようやくとまりが口を離した。

「はずむ、今度はあたしのを嘗めてくれよ」

そう言つて、とまりははずむの身体を起こした。はずむは愛撫の心地好さでぼくとしていたが、次第に意識がはっきりしてくると、眼前にそそり立ったペニスがあることに気づく。

「うわわっ!」

「なんだ、そんなに驚くなよ」

「だって、目の前におちんちんがあつたら誰だつて驚くよ」

「まあ、そりゃそうか。でも、自分のを毎日見てたんじゃないのか?」

「自分のは目の前にないもん」

はずむは、とまりに生えたペニスをまじまじと観察する。

「凄い、本当に生えてるんだ」

「だろ」

「僕より、大きいかも」

「そうか?」

とまりは苦笑するしかない。本来男だった(頃の)はずむのものより大きいなんて。それに、とまりはそんなに大きいとは思っていなかった。上から眺める大きさと、横か

ら眺める大きさは違うのかもしれない。

「さ、はずむ。嘗めてくれよ」

「ええっ!? 嘗めるの? 嫌だよ」

「あたしはいつもはずむの嘗めてたる。自分はフェラさせて、あたしにはしないのか?」

「うっ」

そう言われると弱い。ただ、いつもとまりが自分からフェラしだして、はずむが頼んだことは余り無かったのだが。

「それに、濡れてなくて痛いのははずむだぞ」

はずむは、覚悟を決めた。これが本当の男の明日太のものだつたら絶対にしないところだが、とまりのペニスである。まだ抵抗は少ない。恐る恐る舌を伸ばし、ちろつと亀頭に触れる。

「あ」

とまりは、初めて他人からペニスを嘗められ、身体を震わす。ペニスもはね上がり、はずむの顔にぶつかる。

「わっ!」

「あ、ご、ごめん」

「いいよ」

はずむは気にせず、とまりの亀頭にかぶりついた。

「ああっ!」

亀頭が温かい。はずむの舌がまとわりつく。ペニスがび

くんびくんと弾もつとするが、流石にはずむの口に固定されて動かない。ペニスから腰・背中に抜ける快感に耐えきれず、思わずはずむの頭を掴む。

「ああっ！ はずむ、気持ちいい!!」

「ぶぐっ」

とまりが手と腰に力を入れたために、ペニスが喉の奥に届き、思わず吐きそうになる。それにペニスが口いっぱいになり、顎も外れそう。息も苦しい。涙も出てくる。

(とまりちゃんは、いつもこんなに苦しかったの?)

そう思って、はずむは上目使いになってとまりを見る。とまりの、快感を堪えるような、喜ぶような、表情。口からは喘ぎ声が遠慮無く発せられている。

(とまりちゃんが気持ち良くなってる)

とまりが自分からフェラしてきた理由が分かった気がする。自分の舌がとまりに快感を与えていると思うと、嬉しい。

「あうっ!」

とまりのペニスの中心を液体が突き抜ける。今まで精液は勿論、尿すら通過したことが無かった場所。精液が尿道を通過する感覚と、ペニスが精液を絞り出そうと痙攣して生み出される快感に、思わず前のめりになる。

とまりは、全く初めての感覚に酔いしれた。

(射精って、こんなに気持ち良かったんだ……)

女性器の快感とは全く別種の快感。ペニスが生えたのも悪くないと思った。

(なんか、眠い……)

射精後の軽い眠気を感じながら、とまりははずむの口からペニスを引き抜く。はずむが、口を膨らませている。きつと、口の中は自分の出した精液でいっぱいになってるに違いない。

はずむが、キョロキョロと辺りを見渡している。ティッシュでも探しているのだろうか？ とまりは、はずむの顎を掴んで囁く。

「呑めよ、はずむ」

「ふうっ!?!」

はずむが、目をパチクリさせる。

「あたしには呑ませせて、自分は呑まないのか?」

「ふうふうふ」

はずむは首を振り、抗議の目を向けていたが、諦めてとまりの精液を呑み込んだ。「ぐくり、ぐくりと喉が動く。はずむが自分の精液を呑み込んでいると思うと、とまりは高揚した。男が精液を呑ませたがる理由が分かる気がした。

「酷いよ、とまりちゃん。いつもとまりちゃんが勝手に呑んでたんじゃないか」

「あれ？ そうだっけ？」

「苦い。気持ち悪い。なんか口の中が変」

「でも、これでおあいこだろ」

「うー あれ？」

はずむは、とまりの内股が濡れている事に気づいた。そつと手を伸ばす。ぐちより。指に粘膜の柔らかく、滑った感触がある。

「あつ！ 何するんだはずむ」

つぶり。中指がとまりの中へと吸い込まれる。

「ああつ！」

「おちんちんは生えても、膣はそのままなんだ」

「そ、そうなの……か？」

ペニスが生えたことに気を取られ、それ以外のことは確認していなかった。自分の女の部分が無くならずに残った事は嬉しい。

はずむがとまりの膣の中を挿ね回す。懐かしい感覚。やっぱり膣を攻められるのは気持ちいい。その快感がペニスとも連動したのか、再びむくむくと起き上がり、固くなってきた。

「はずむ、勃たせてくれてありがとう。今度はあたしの番だ」

そつ言っでははずむを寝かせ、その上に覆い被さる。ペニ

スを手に持ち、はずむの膣口に当てる。

「行くぞ」

「うん」

はずむが頷いた事を確認すると、とまりは身体を進めた。
「痛っ！」

やす菜によって処女膜が破られたとは言っても、指とペニスは違う。例え何本か集めても、女の細指よりペニスは太い。それに圧迫されてもペニスは細くならない。それに破られてからまだ一・二時間程度しか経っていない。せつかく塞がった傷口が裂ける。ただ、最初やす菜に破られた時ほどではない。

(なんだ？ これ)

とまりは、再び初めての感覚を味わう。口の中とは違う。ペニスがまんべんなく温かく包まれていく。根本は縛られててきついのが、はずむの中に入ってしまった所は、むしろ開放された感じだ。温かさだけが伝わってくる。これが、はずむがいつも味わっていた感覚。

はずむもまた、初めての感覚を味わう。自分の身体が押し広げられてる感覚。とまりが自分の身体の奥へと入ってくる。とまりと一体化し、繋がってくる感じがする。これが、いつもとまりが味わっていた感覚。

「あつっ」

はずむは身体の奥底からの刺激で、思わず声を上げる。同時に、とまりも亀頭に固いものを感じた。とまりのペニス、はずむの中に全て入った瞬間だった。

「はずむ……」

「とまりちゃん……」

二人は見つめ合う。

「これが、はずむの中なんだな」

「とまりちゃんが、僕の中にいるの分かるよ」

「ああ、はずむの中、暖かくて、気持ちいいよ」

そう言っ、とまりが身体を揺らし始めた。

「も、もう動くの？」

はずむは、もう少しとまりを味わっていたかった。

「だって、気持ちいいんだ。身体が勝手に、止まらないんだ！」

そう言っ、段々と動きを早めていった。

「ああ、とまりちゃんが、出たり…入ったり……」

ペニスを中に入れた経験が無いとまりは、単純にピストン運動を繰り返す。しかし、初めての彼女らにはそれで十分だった。

「ああ、凄い。はずむ、気持ちいい……」

「と、とまりちゃん……」

「ああ、なんか、また、出てきそつだ。出る。ああ、はずむ、返すよ。お前からいっぱい貰った精子を返すよ」

「ああっ！」

とまりは、はずむの肩を掴み、身体を密着させる。腰をこれ以上無いくらい押し付ける。どくっ、どくっ、どくっ。再びとまりの精液が尿道を突き抜ける。その先は、今度は口の中ではなく子宮口。本来行き着くべき場所に吐き出される。

「はあ、はあ……」

「とまりちゃん、いったの？」

「ああ、分かるのか？ はずむ」

「とまりちゃんのおちんちんがピクピクッて、動いた。これなんでしょう？」

「ああ、そつだ。凄いな、初めてで分かるなんて」

とまりは、何回も経験を重ねて、ようやく分かるようになったのを思い出す。

「精液が熱いとか、全然感じなかったけど、分かるようになるの？」

「いや、わかんないよ」

はずむの精液を何百回と受け止めてきたが、精液が熱いなんて感じたことなんて無い。そもそも精液は体内温度よ

りも低温の上、子宮に温度覚は無い。

とまりは、いつまでも繋がった状態にいるわけにはいかないで、はずむから離れた。とまりのペニスが抜けると、そこから白い精液が流れ出てくる。

「うわっ！ 出てきた」

「精液が出てくるのなんて、見慣れてるだろ」

「だって、自分から出てくるのは初めてだもん。あ、とまりちゃんの精液も僕と同じなんだ」

最初のとまりの精液は呑み込んでしまったので、見るのは初めてだ。

「ティッシュ、ティッシュ」

とまりがティッシュを探してはずむにお尻を向ける。それを見て、はずむはにっこりと笑い、ベッドの横からバイブを取り出す。はずむが男だった時、お互いの部屋でセックスしまくった。だから両方の部屋にそれなりの道具が置いてあり、女になってからもそのままになっていた。

「ねえ、とまりちゃん」

そう言って、はずむはとまりの腰を掴んだ。

「なんだ？ はずむ」

とまりが振り向くと、はずむがバイブを持っている事に

気づいた。

「僕まだイってないよ」

はずむはとまりの膣口にバイブを当てると、そのまま差し込む。びしょびしょに濡れているので、すんなりと中に入る。

「はあっ！ はずむ、何を？」

「だって、とまりちゃんばかりイってずるいよ」

はずむはバイブのスイッチを入れ、さらにぐりぐりと回す。

「ああっ！」

その刺激から、再びとまりのペニスが大きくなってきた。

「分かった。分かったから」

とまりは、バイブを挿されたまま、はずむの元に戻る。

「はずむ、女になってからの方が積極的だな」

「そう？ あ！」

再びペニスがはずむの中に吸い込まれる。

「あああ、震えてる！ 震えてるよ」

とまりの膣に刺さっているバイブの振動が、ペニスを通じてはずむにも伝わる。ペニスの細かい振動がはずむを刺激する。

「ああ、気持ちいい。まるで、はずむのちんちんが中に入ってるみたいだ」

ペニスがはずむの中に入っている感覚と、自分の膣にバイブが入っている感覚を同時に味わうなんて、世界中でとまりが初だろう。

はずむはとまりの股間に手を伸ばし、バイブの強度を強め、さらに中に入れようとす。

「伝わってくる。とまりちゃんから震えてるのを感じるよ」

「止めて、止めてくれ、これ以上は、もう……」

「だったら、とまりちゃん動いてよぉ」

「分かった、分かったから」

ようやく、はずむはバイブから手を離す。しかし、振動スイッチはオンのまま。とまりは腰に全く力が入らないが、足や腕を使って、辛うじて身体を上下に動かす。バイブの振動音と、液体が擦れる淫らな音が響く。身体を持ち上げられないために、胸と胸が密着する。はずむの豊かな胸と、とまりの小振りな胸が擦れる。

「あふ、胸が…… やっぱり、胸って気持ちいいんだね」

「だろ…… 女の身体のどこが気持ちいいかは、あたしの方が知ってたんだ」

「おちんちんの使い方は僕の方が…… とまりちゃん、もっ

と腰を使って」

「無理だ。全然力入んない……」

「じゃあ、僕が上になるよ」

そう言って、はずむは身体を起こす。とまりは身体に全く力が入っていないようだ。はずむは、とまりが危なくないように両腕で支え、ペニスが抜けないように、ゆっくりと寝かす。次に身体を起こして、腰をぐっと沈めた。

「あつっ！」

身体の奥から、突き抜けるような感覚が湧き上がる。

「とまりちゃん、なんか、身体の中が……」

「あたしも、固いの分かるよ」

「じゃあ、奥ってここなんだね」

「ああ、そうか」

はずむはさらに身体を揺さぶる。

「気持ちいいよ、とまりちゃんが奥に当たって気持ちいいよ」

「あたしも、はずむの中、気持ちいい……」

二人の快感の高ぶりは次第に頂点に達し、再びとまりの精がはずむに注ぎ込まれた。

2

何度も絶頂し、くたくたになった二人はベッドで抱き合っていて休んでいた。

「とまりちゃん、女の子って気持ちいいんだね」

「あたしも、はずむの中気持ちよかった」

「女の子になってからの初めてはやす菜ちゃんだけど、とても恐くて、あんまり気持ちよくなかった」

やす菜に犯された時の恐怖が再び蘇^{よみがえ}り、はずむの顔が沈む。

「触られたり、胸を揉まれたり、ローター押し付けられたり、確かに気持ちはいいんだけど、それよりも恐かった。でもね」

はずむの顔がぱあっと明るくなる。

「とまりちゃんとは、本当に気持ちよかった。とっても。とっても、安心できて、気持ちよかった」

「ありがとう、はずむ」

とまりの目から涙がこぼれる。

「やっぱり、僕、とまりちゃんが好き。大好き」

「あたしも、あたしもはずむが好きだ」

そう言っつて、二人は強くお互いを抱き締め、またキスをする。

「なんか、順番が逆になったな」

「何が？」

「普通は、告白して、付き合っつて、それからセックスする

もんだろ」

「そうだね、僕らは、セックスが先だったもんね」

「でも、これからは普通のカップルだな」

「そうだね」

女になった元男と、ペニスの生えた女の子のカップルは全然普通でない事に、今の二人は気づかない。

「もうそろそろ起きようか」

「うん」

そう言っつて、二人は起き上がる。

「あ」

「どうした？」

「まだ、出てくる」

はずむの膣口から、とまりの精液がちよろちよると漏れる。

「結構大変だぞ、拭いても拭いても出てくるから」

「そうなんだあ……」

はずむはティッシュを取っつて、自分の股間を拭く。

「あ……」

「どうしたの？ とまりちゃん」

「中に出しちゃったけど、大丈夫か？」

「あ、避妊してない」

さーつと、二人の顔から血の気が引く。

「ど、ど、ど、どうしよう?」

「な、何ではずむ言わなかったんだよ!」

「だって、それどころじゃなかったし、男の子の時してなかったし……」

「あたしがピル飲んでただろ!!」

「あつ、そうか!」

はずむが男だった頃の避妊法はもっぱらピル。そのために、はずむはゴムの事をすっかり忘れていた。はずむが女になってからは、お互い相手もいないので、二人ともピルを飲むという事など無かった。もともと、例えとまりがピルを飲んでいた所で意味は無かったただろうが。

「お前、排卵日いつだ!？」

「えっと、排卵日って、どうやって分かるの?」

「基礎体温付けてないのか?」

基礎体温なんて、保険体育の授業で簡単に習っただけですっかり忘れていた。それに、自分が男とセックスをし、妊娠して子供を産むという発想自体が頭に無かった。

「そ、そんなの付けてないよ」

「女だったら、基礎体温ぐらい付ける!」

「だって、だって、だってえ……ど、ど、ど、どうしよう、とまりちゃん!」

あとがき

皆さんこんにちは。PARALLEL ACT主催者TomOneです。つたない本を手にとってくださってありがとうございます。つたない本です。

今回は『かしまし〜ガール・ミーツ・ガール〜』本です。これから冬までに参加するイベントは『マリみて』『やらなのは』オンリーが主。一応オールジャンルとしてはサンクりに申し込んでますけど、それに新刊出すのはきついので、夏コミで『かしまし』本です。

スペースは『なのは』で取っていたので、新刊『なのは』で、冬に『かしまし』で申し込むべき何でしょうけど、『なのは』は既刊が二冊あるし、うずうずしてる時に書くのが一番ですから。それに、溜ったものは出さないと。それに

冬までにつづつづ感が無くなるかも知れないし。

今回の本、とまりが「ふたなり」です。男が女になるくらいですから、女にペニスが生えても何の問題もありません（そうか？）。宇宙人がいれば何でもOK。こりゃ便利だ（笑）。実際ペニス生やしたら、惑星間生命保護法により、その事を全世界に放送しそうです。とまり、生きてられないな。

本来、私は「ふたなり」ってあまり好きじゃないんですけど、ペニスが生えてしまったとまりの苦悩が書きたくなくて、ふたなりにしました。構想段階では、もっと苦しんで、もっと有無を言わさずはすむを襲うつもりだったんですけど、なんか甘々な展開です。

やす菜は、黒いです。本当は黒くないのかも知れないですけど、天然黒な気はするし、黒い方がエロ本には最適です（笑）。でも黒くないやす菜も書いてみたいです。

男のはすむととまりがセフレです。本編見るとあり得なさそうですけど、ちょっと道を踏み外すとなつていそうです。自分では意外に違和感ないんですけど、どうでしょうか？ 勿論恋人じゃなくてセフレというのがポイントです。いきなり恋人同士だったら違和感あります。

'06年8月9日

最後に、はずむは妊娠してません。とまりにペニスも生えても、睾丸までは無いので無精子です。逆に卵巣や子宮はそのままなので、とまりが妊娠することはあるでしょう。

それにしても、『なのは』もそうですけど、ひらがなの名前が多い作品は小説にした時苦しいです。どこまでが副詞や助詞がつかないと、どこが文節の区切りか分かりません。文章に苦しみます。やす菜の名前が一番ましです。フェイトやアリサはとっても良いです。

今後の予定ですが、サンクリとマリみてオンライン、とらハオンラインに申し込み済み。なのはオンラインも申し込み予定です。冬は何で申し込みか決めてないですが、『なのは』辺りで申し込みと思います。

本は、マリみて本は出すつもりです。まだネタ無いんですけど。全てのイベントで本を出すのは辛すぎるので、冬になのは本という事になるかと思っています。NetNewsに投稿した『なのは』の感想を再編集した本をもしかしたら途中くらいに出すかも知れません。

そして『かしまし』後半感想本のキャプチャー・コメント手伝いもしてると思います。それは冬になるでしょう。

それでは、またそれらの時に。

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』『魔法少女リリカルなのはA's』の同人誌を発表する。

なにまし

PARALLEL ACT SERIES

2006年 8月13日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>
E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。
送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

